本文章已註冊DOI數位物件識別碼

airiti Library

# 交錯於物語與歷史之間－有關西川滿《台灣縱貫鐵道》作品創作時隨筆揮灑之點滴手記－

Interplay of Story and History as Narrating; a Reading Note of Nishikawa Mitsuru 'Taiwan Jyukan Tetsudou'

doi:10.29714/TKJJ.200912.0004

淡江日本論叢, (20), 2009

作者/Author： 落合由治(Ochiai Yuji)

頁數/Page： 49-73

出版日期/Publication Date：2009/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200912.0004

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

# 交錯於物語與歷史之間

## —有關西川滿《台灣縱貫鐵道》作品創作時隨筆揮灑之點滴手記—

落合由治

淡江大學日文系教授

### 摘要

將歷史小說與記載歷史當作一個完整的「作品」來看的話，兩者皆可稱為專門性創作類別的敘述成果。因為歷史小說與記載歷史，皆是與「現實」有著多面相關係的象徵。「作品」的內容，乃是日常使用的語言，掌握現實之行為表現。

本論文依據上述的觀察，著眼於台灣日據時代有名的日本人作家西川滿創作《台灣縱貫鐵道》的歷史背景以及創作作品創作時隨筆揮灑之點滴手記間之關係，進行檢討研讀「作品」時敘述者處於如何的「現實」狀況？又如何展現此「現實」？

而結果顯示：敘述者沒有擁有展現對於所處的當時現實狀況的方法。於是就此點可以斷言，空想與非空想間的差異性其實是極少。

關鍵字：歷史小說　記載歷史　作品　現實　敘述者

airiti

# Interplay of story and history as narrating; a reading note of Nishikawa Mitsuru 'Taiwan Jyukan Tetsudou'

Ochiai Yuji
Professor, Tamkang University, Taiwan

## Abstract

When the historical romance and the history description are seen as "Work", both of them is the results of narrating about a special genre. The historical romance and the history description are symbols of various relations to "Reality". The content of "Work" goes side by side with the act that the daily language subject understands the reality. In this thesis, the historical background of 'Taiwan Jyukan Tetsudou' that the writer Nishikawa Mitsuru had left for the modern history of Taiwan is taken up. And, this thesis has examined what "Reality" in which the narrator was left we have to reproduce to read "Work".

As a result, we do not have the method of reproducing a situation at that time faced by the narrator. Moreover, the difference between the fiction and nonfiction is unlimitedly small in this point.

Keywords : historical romance, history description, Work, Reality, narrating

airiti

# 語りとしての物語と歴史の交錯
## ―西川満『台湾縦貫鉄道（１）～（１１）』ノート―

落合由治
淡江大学日本語文学科教授

**要旨**

歴史小説も歴史記述も「作品」として見た場合、それは共に専門的ジャンルの語りの成果である。それがともに人間が日常的に行っている言語をとおしての「現実」との多様な関係の象徴あるいは最も昇華された姿であると考えれば、「作品」から読み取りえる多様な内容は、日常的言語主体が現実を把握する行為と並行させて捉えられうる。ここでは、台湾の歴史に関して作家・西川満が残した『台湾縦貫鉄道』の歴史的背景を取り上げ、「作品」を読むために語り手が置かれたどのような「現実」を再現する必要があるのかという検討をとおして、歴史を巡る語る主体と現実との関係をスケッチしてみた。

その結果、語り手の対峙した当時の状況を私達は再現する方法を持たず、その点でフィクションとノンフィクションの差異は限り無く小さいことが窺えた。

キーワード：歴史小説　歴史記述　作品　現実　語り

airiti

# テクストとしての物語と歴史の交錯
## ―西川満『台湾縦貫鉄道（１）～（１１）』ノート―

落合由治
淡江大学日本語文学科教授

### １．はじめに

小説の一つのジャンルとして歴史小説がある。一見すると小説は空想を物語るフィクションにすぎず、その一方で歴史は事実を記したノンフィクションであり、歴史小説は小説である以上単なるファイクションに過ぎない。しかし、現在、物語と歴史の関係は歴史学、テクスト研究、文学研究の争点となっている。野家啓一（2005）は、「歴史は超越的視点から記述された「理想的年代記」ではない。それは、人間によって語り継がれてきた無数の物語文からなる記述のネットワークのことである。そのネットワークは、増殖と変容を繰り返して止むことがない」と述べている[1]。ともに物語るという行為によって生まれる小説と歴史はそうした行為の共通の基底から生まれているとすれば、フィクションとノンフィクション、「空想」と「現実」の概念に関しても、人文・社会科学研究の中で、大きな転換が起ころうとしていると言えよう。こうした問題に共通しているのは、それがすべて何らかの意味で具体的状況の中にある主体の言語使用とその表現に関わっているという点である。

歴史小説も歴史記述も「作品」として見た場合、それは共に専門的ジャンルの語りの成果であり、人間が日常的に行っている言語をとおしての「現実」との多様な関係の象徴あるいは最も昇華された姿であると考えれば、「作品」から読み取りえる多様な内容は、日常的言語主体が現実を把握する行

[1] 野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波書店 P13

airiti

為と並行させて捉えられうる。ここでは、台湾の歴史に関して作家・西川満が残した『台湾縦貫鉄道』を取り上げ、「作品」を読むために語り手が置かれたどのような「現実」を再現する必要があるのかという検討をとおして、歴史を巡る語る主体と現実との関係をスケッチしてみたい。

## １．西川満について

日本統治時代の台湾文壇で中心的役割を果たしていた西川満は、現在の日本でも台湾でもほぼ忘れられた作家であり、その事績が再び注目を集めるようになったのは 1990 年代以降の日本統治時代台湾文学研究の進展に伴うものである[2]。

### （１）インターネットでの紹介

従って、現在の日本社会が持っている認識もかなり限定されたものである。西川満に関してインターネットで容易に目に触れる西川満の経歴は以下のようなものである。一つは直木賞の候補作家という紹介である。

A)「西川満」『直木賞のすべて』

生没年月日：1908（明治 41）年 2 月 12 日～1999（平成 11）年 2 月 24 日
経　歴: 福島県会津若松市生まれ。早稲田大学文学部仏文科卒。
受賞歴 第 4 回文芸汎論詩集賞・詩業功労賞（昭和 12 年)『亜片』台湾文化賞（昭和 17 年)『赤嵌記』第 1 回夏目漱石賞佳作（昭和 21 年)「会真記」
処女作 詩『媽祖祭』(昭和 10 年)　個人全集 『西川満全詩集』（昭和 57 年 2 月・人間の星社刊）
直木賞第 22 回候補「 地獄の 谷底」(『キング』昭和 24 年☆月号 昭和 24 年☆月・光文社刊『現代小説代表選集　第 5』所収 昭和 27 年☆月・新小説社／新小説文庫『台湾脱出』所収）[3]

B)「西川満」『早稲田と文学』

---

[2] 中島利郎（1993)「<忘れられた作家たち・一>「西川満」覚書：西川満研究の現況」『聖徳学園岐阜教育大学国語国文学』12　111-122P によれば「「西川満」という名前を聞いても、現在ではきわめて少数の人を除いては、知る人は少ないと思う」と書き、西川満の研究が緒に付いたばかりであると述べている。

[3] 「西川満」『直木賞のすべて』http://homepage1.nifty.com/naokiaward/kogun/kogun22NM.htm

airiti

もう一つは、出身の早稲田大学での文学者としての紹介である。

> 西川満（にしかわ・みつる）
> 1908～。会津若松出身だが、3歳で渡台。仏文科卒後、編集者を経て詩作・創作に専念。「媽祖」「文芸台湾」を刊行。詩集『亜片』で詩業功労賞を受賞。『会真記』で夏目漱石賞を受賞。天上聖母算命学を創唱。装本を大切にし、一冊一冊の創作に精力を注いでいる[4]。

以上はいずれも西川満について日本に関わりのある部分か作品のみを取り上げ、台湾での文学活動に関する内容はほとんど記していない。

C)「西川滿」

一方、日本側よりも台湾での記述は台湾での文学的業績を認める内容となっている。

> 西川滿出生於日本福島縣會津若松市。三歲時隨雙親來台灣，其間除 1927-1933 年返日就讀大學外，一直到 1945 年日本戰敗，1946 年離台爲止，在台灣度過約三十年的歲月。畢業於早稻田大學文學部法文科，大學畢業論文研究韓波（Arthur Rimbaud，1854-1891），後任職於《台灣日日新報》。
> 西川的創作始自台北一中時期，1935 年出版首部詩集《媽祖祭》。曾創辦《台灣風土記》、《華麗島》、《文藝臺灣》等雜誌。其所創辦的《文藝臺灣》，較代表日本人的台灣觀點，與從該刊出走的張文環等創辦的《臺灣文學》的臺灣人觀點，適成對比。西川滿的作品多描寫台灣的歷史與風土，以異國主義陪襯著幻想的情調呈現。
> 西川滿身後將兩萬餘冊書捐贈真理大學台灣文學資料館，今藏於麻豆校區[5]。

日本の Wikipedia はほぼ台湾の内容の翻訳で、台湾での項目のほうがより早くから出されている。また、台湾の公的機関による紹介や記事も多い[6]。以上から、戦後の日本社会で戦前の台湾に関する日本人の活動の事績が社会的記憶としてほぼ抹消されたことが窺えると同時に、台湾社会では社会的

---

[4] 「西川満」『早稲田と文学』http://www.littera.waseda.ac.jp/sobun/n/ni004/ni004p01.htm

[5] Wikipedia「西川滿」http://zh.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%B7%9D%E6%BB%BF

[6] 臺灣記録 http://memory.ncl.edu.tw/tm_new/subject/literature/japan04.htm、台湾文学部落格 http://140.119.61.161/blog/forum_detail.php?id=52&classify_id=6 などを参照。

airiti

記憶として伝承されてきたことが分かる。

（２）略歴

現在、日本人の研究者は日本では抹消された日本統治時代の西川満の事績について研究を進め、その文壇での役割を明らかにしてきた。西川満の台湾での事績を明らかにしたのは中島利郎の一連の日本統治時代の台湾文壇に関する研究である。それによれば、西川満の台湾での事績は以下のようなものである。

1910（明治 43）年　祖父の弟秋山義一の経営する台湾・基隆の秋山炭鉱に父西川純が招聘されたため台湾へ移住。

1914（大正 3）年　台北第四尋常小学校へ入学。文学に興味を持ち、菊田数夫（一夫）と知り合う。日蓮宗に共感する。

1920（大正 9）年　台北一中に入学。雑誌、詩集を刊行。

1923（大正 12）年　『台湾新聞』への投稿小説「豚」が一等に入選。台北高校の受験に失敗し、1926 年頃から『台湾日々新報』にたびたび投稿。

1928（昭和 3）年　第二早稲田高等学院に入学。仏文学を専攻。西條八十、山内義雄、吉江喬松に師事する。1930 年に早稲田大学仏文科に入学。「芸術至上主義的傾向は三人の教授の影響によるところが大きい」

1933（昭和 8）年　早稲田大学卒業。吉江喬松から「地方主義のためにいっしょうをささげよ、との教えをいただき、台湾へ変える決意を固めた。」吉江の送別の詩の語句にちなんで、台湾を「華麗島」と呼ぶようになった。台北帝大矢野峰人、島田謹二を訪問し、二人は西川の理解者になる。

1934（昭和 9）年　『台湾日々新報』社に入社し、「文芸欄」を復活させる。

1938（昭和 13）年　詩業功労賞を 1935（昭和 10）年に出した『媽祖』と詩集出版事業で受ける。

1939（昭和 14）年　『台湾風土記』を創刊。台湾詩人協会設立。日本人、台湾人 60 人が寄稿する詩集『華麗島』出版。

1940（昭和 15）年　台湾詩人協会を改組して台湾文芸協会を設立して、『文芸台湾』発刊。小説『赤嵌記』出版。

1942（昭和 17）年　『台湾日々新報』社を退社。『華麗島民話集』、『台湾文学集』を刊行。龍英宋、濱田隼雄、張文環と東京での第一回大東亞文芸者大会に参加。

airiti

1943（昭和 18）年　『赤嵌記』により「台湾文化賞」授賞。『台湾縦貫鉄道』を連載。
1945（昭和 20）年　43 年の父の死により、樹林の昭和炭鉱社長に就任。『文芸台湾』廃刊。敗戦後、旧総督府情報課から「戦争犯罪人名簿を提出するのに、あなたと濱田隼雄を台湾文化の最高指導者として挙げたと言われた」翌年に、日本へ帰国。
（参照：中島利郎（1993)「西川満覚書　西川満研究の現況」『国語国文学』12 聖徳学園岐阜教育大学）[7]

（３）研究情報

1990 年代から日本で始まった西川満の研究については、まず『日本統治期台湾文学日本人作家作品集第二巻』に中島利郎による「西川満作品解説」「西川満著作年譜」「西川満編集雑誌一覧」「西川満研究文献目録」「西川満略歴」がある[8]。その後も中島利郎は日本統治時代の台湾文壇に果たした西川満の役割を明らかにしている[9]。垂水千恵も文化帝国主義あるいはプロレタリア文学研究の視点から一連の日本統治時代の台湾文学に関する研究で西川満および当時の日本人の役割を論じている[10]。

こうした研究によって、西川満の評価は「戦争協力者」、「台湾人作家の抑圧者」という評価と同時に、その作品にも向けられるようになっている。炭鉱主の父を持つ金持ちとして当時の台湾の日本人社会からも反感を持たれ、その台湾文学で

[7] 中島利郎編（1998)『日本統治期台湾文学―日本人作家作品集第二巻西川満』緑蔭書房 P509～512 の中島利郎作成による年表による。
[8] 同注 7P357-512 参照。
[9] 中島利郎（2002)「日本統治末期の台湾文学―台湾総督府情報課編『決戦台湾小説集　乾之巻/坤之巻』の刊行」『岐阜聖徳学園大学紀要外国語学部編』41 1-21P、中島利郎（2007)「日本統治期台湾文学研究―西川満論」『岐阜聖徳学園大学紀要外国語学部編』46 59-64P、中島利郎（2006)「日本統治期台湾文学研究―「台湾文芸家協会」の成立と『文芸台湾』西川満「南方の烽火」から」『岐阜聖徳学園大学紀要外国語学部編』45 91-108P を参照。
[10] 垂水千恵（1994)「台湾人作家のアイデンティティと日本の関係について― 邱炳南を例として」『横浜国立大学留学生センター紀要』1 84-100P、垂水千恵（1995)「日本時代の台湾文壇と大政翼賛運動に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』2 102-110P、垂水千恵（2005)「台湾新文学における日本プロレタリア文学理論の受容―芸術大衆化から社会主義リアリズムへ」『横浜国立大学留学生センター紀要』12 91-110P を参照。

airiti

の各種雑誌創刊や台湾文芸協会などでの役割についても、同時代の張文環などから「有閑マダム」などと批判されていたことが指摘されている一方で、中島利郎は西川満の活動が、台湾人作家による『台湾文学』の誕生につながり、『台湾風土記』、『美麗島民話集』など台湾の民俗を見直すきっかけになったと評価し、西川満の文学について以下のように述べている。

> いついかなる場合でもカメラのように性格にうつす写実精神は必要であるが、写実が単なる写実に終わったのでは、それは小説になり得ない。（西川満 1943 年 6 月 1 日『文芸台湾』6-2「文芸時評」）

> 西川満の「芸術の世界」＝「文学の世界」とは、絶えざる「美の追究」にほかならない。そして、この抽象的な美を構築するものは、「面白さ」と「解りやすさ」であった。（中略）西川満は、小説を書くにあたってはもちろんストーリーの組立てに注意ははらったが、ストーリーの面白さは事実を写実することではなく、事実を空想力という媒介をもって新たに構築し直すことが、自己の小説のありかたという信念をもっていた。（中略）この個人的かつ人工的な要素と素材の混淆が、ロマンチシズムやエキゾチシズムで縁どられて彼の小説に描写される。その結果、西川満の小説は極めて耽美的幻想的になる。それが彼の小説の「面白さ」を作り上げている[11]。

西川満の台湾文壇での役割については、現在こうして再評価が行われているが、その作品についての研究はまだ緒に付いたばかりである。

## ２.『台湾縦貫鉄道』について

『台湾縦貫鉄道』において西川満が描こうとしたのは日清戦争後の 1895 年から 96 年にかけて当時の大日本帝国陸軍による台湾占領における台湾での出来事を鉄道建設を絡めて描いている。

### （１）作品の概要

中島利郎は解説で以下のように述べている。

1942 年、「台湾の汽車」（台湾での最初の鉄道建設をおこなった

[11] 中島利郎（1995）「西川満と日本植民地期台湾文学― 西川満の文学観」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』29 141-158P

airiti

台湾巡撫劉銘伝とドイツ人技師ベツケル、ピテランの苦心を描いている)、「二人の独逸人技師（「台湾の汽車」の続編)」、「龍脈記（「二人の独逸人技師」の続編）台北基隆間のトンネル工事の苦心」、1943年「桃園の客（台湾巡撫劉銘伝と保守派との対立を描く)」などが、『台湾縦貫鉄道』史を長編小説にまとめるための前史となる短編小説として発表されている[12]。

1943～1944年『台湾縦貫鉄道』この小説は、「台湾縦貫鉄道・白鷺の章」で、『文芸台湾』に5回、『台湾文芸』に6回が掲載されて、1978年に鉄道建設の写真などを添えて、人間の星社から出版。単行本には「白鷺の章」の副題はない。その「あとがき」によれば、この章を正編として引き続き核心部となる続編の「連霧の章」が書き継がれる予定で、そのあらすじが述べられている。

西川満は、以下のように、執筆動機を後年の回想の中で書いている。小学校に、北白川宮の油絵が掛かっており、後に、

「北白川宮が、会津を盟主とする東北連合軍の推戴せる輪王寺宮であることを知り、敬慕の念、激しくわが一生を貫く。／長じて「台湾縦貫鉄道」を執筆するが、北白川宮の奥底上陸を物語の発端とし、台南に於ける御病没を終末としたのは、この敬慕の情に基づくからである」

また、単行本の「あとがき」にも、幼少時からの鉄道への興味、「会津武士の血を引き「身を殺して仁をなす」」父が北白川宮を敬慕していたのと同様に自分も敬慕していたこと、父が「台湾文化賞」授賞を喜んでくれたことをきっかけに、「芸術至上主義を脱却しよう」が書かれている[13]。

この作品に描かれた出来事の中で、(十一）は北白川宮の死で終わっており、執筆動機について西川満が北白川宮を作品で描こうとしたことが分かる。

（２）先行研究

今までのこの作品への評価には以下のような論がある。まず中島利郎は、以下のように作品解説で述べている。

「写実を越えて写実を役立てる」小説、これが「台湾縦貫鉄道」であった。しかし、果たしてこの小説は西川満の意図したように「写実を越えて写実を役立てる」小説になったかどうかは疑問である。

西川満は本質的には詩人であり、それゆえ短編小説は詩情溢れるものが多く、ストーリーも締まって興味が尽きない。（中略）しかし、長編小説として全体の構成を見た場合には彼の短編小説に比して出来のよい作品とは思われない。また、西川満が、前述したほどこの小説を自己の中で重要視したのなら、核心部に当たる「連霧の章」を未発表のままにしてお

[12] 同注 7P407 参照。
[13] 同注 7P411-414 参照。

airiti

くはずがないと思うのである[14]。

一方、台湾の研究者はこの作品を帝国主義的な意図を持つ作品と捉えている。

> 西川滿《台灣縱貫鐵路》是部由五十六個章節構成的壯大歷史小說，鉅細靡遺地描繪了台灣割讓日本之後，接收台灣的日軍與台灣反抗軍爲期半年的戰爭，從一八九五年五月日軍登陸基隆澳底及進入台北城舉辦台灣總督府始政儀式開始，到十月攻陷古都台南舉行戰歿者招魂儀式爲止。《台灣縱貫鐵路》主要情節大致與日人所著《台灣鐵道史》、《南進台灣史攷》以及英國記者所著 Island of Formosa: Past and Present 之史實紀錄相符，清朝與日本歷史人物也多以真名登場。然而，小說當中仍有許多地方出自作者的虛構及刻意改寫，這些與史實有所出入的敘述不只是小說的修飾手法，而帶有濃厚的帝國意涵。雖然名爲《台灣縱貫鐵路》，但小說的敘述僅止於一八九五年日軍勘查及建設鐵路的草創階段，4 所表象的其實日本在台灣的現代化（以鐵路建設爲起點）開始之前的台灣。小說裡忠實複製領台初期廣爲流傳日本國內的殖民地台灣之負面形象——土匪出沒的瘴癘之地，但也提及日軍登陸時台灣既有的兩個「現代」表徵：一個是以北台灣爲據點進行海上貿易的西洋勢力，另一個則是從基隆到新竹的鐵路[15]。

この作品への評価として、ポストコロニアリズムからの評価が固定した評価となっていると言えよう。

（３）小説の背景

しかし、語る主体と歴史的状況の把握という語りの問題をこうした歴史小説作品の理解に取り入れてみると、小説のコンテクストとなる多くの史実が読解に必要になることが分かる。そのいくつかを以下に紹介する。

a）北白川宮能久親王

第一はこの小説の執筆動機である北白川宮に関する伝承、事績である。西川満の事績が戦後の日本社会で抹消されたように北白川宮に関する伝承、事績もほぼ一般市民の視線からは抹消されたものである。しかし、インターネットの普及に

---

[14] 同注 7P414 参照。

[15] 朱惠足（2005）「帝國主義、國族主義、「現代」的移植與翻譯：西川滿《台灣縱貫鐵道》與朱點人〈秋信〉」『中外文學』第 33 卷第 11 期 111-140P。また邱雅芳（2009）「向南延伸的帝國軌跡－西川滿從〈龍脈記〉到《台灣縱貫鐵道》的台灣開拓史書寫」『臺灣學研究』第七期國立中央圖書館臺灣分館 77-96P 参照。

airiti

よりこうした忘れられた戦前の記憶も一部ながら目にすることができるようになっている。現在、インターネットで流布している資料を以下に紹介する。

Wikipedia「北白川宮 能久親王」

（きたしらかわのみや よしひさしんのう、弘化4年2月16日（1847年4月1日） - 明治28年（1895年）10月28日）は、幕末・明治時代の皇族、陸軍軍人。

伏見宮邦家親王の第九子。仁孝天皇の猶子として11歳で親王宣下を受けて能久親王の名を受けた後、出家得度して青蓮院門跡を相続。慶応3年（1867年）、江戸に下って上野の寛永寺に入り、日光輪王寺門跡、天台座主となった。この頃の名を輪王寺宮公現法親王（りんのうじのみや くげんほっしんのう）という。

輪王寺宮は戊辰戦争で上野戦争を避けて東北に逃れ、仙台藩に迎えられて奥羽越列藩同盟の盟主に擁立された。仙台藩が新政府軍に降伏した後は京都で蟄居を申し付けられるが明治3年（1870年）、許されて伏見宮家に復帰、伏見満宮（ふしみみつのみや）と呼ばれた。弟北白川宮智成親王の遺言により還俗して北白川宮家を相続し、北白川宮能久親王と呼ばれた。還俗後は陸軍に入り、ドイツに留学。 帰国後は陸軍少将、さらに中将に昇進している。また、獨逸学協会の初代総裁となり、後に獨逸学協会学校設立に尽力した。

明治26年11月10日に第4師団長となる。明治28年（1895年）、日清戦争によって日本に割譲された台湾平定に向かい、第1師団長として出征中の台南にて薨去。政府はマラリアによる戦病死と発表したが、抗日ゲリラによる暗殺であったとの説もある。いずれにせよ皇族としては初めての外地における戦没者である。陸軍大将に特進後国葬となり、豊島岡墓地に葬られた。また国葬時より神社奉斎の世論が沸き起こり、台北に台湾神社（のち台湾神宮）、終焉の地には台南神社が創建された。また、後に台湾各地に創建された神社のほとんど主祭神とされていた。敗戦後、台湾神宮と台南神社は廃社となったため、現在はその御霊は靖国神社にて祀られている。

一時は朝敵の盟主となり、また台湾平定の英雄とされ、不運の死をとげた数奇な人生は日本武尊に喩えられた。子に、竹田宮恒久王、北白川宮成久王、小松輝久などがいる[16]。

北白川宮の遺跡は日本国内でも台湾関連の遺跡として残っている。

中華週報「日光のネットワークと台湾」

又吉氏によると、日本には南は沖縄から北はエトロフ島まで、

[16] Wikipedia「北白川宮」http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8C%97%E7%99%BD%E5%B7%9D%E5%AE%AE%E8%83%BD%E4%B9%85%E8%A6%AA%E7%8E%8B

airiti

大小合わせて五百五十もの「日光の分社」がある。台湾各地の神社に「台湾平定・鎮護の神」として祀られた北白川宮は、日本国内では、こうした日光の「全国ネットワーク」によって、台湾植民地支配の精神的バックボーンとなったのではないかということだ。今回のバスツアーを通じて、こうした新しい視点から日本と台湾の近代史を見直す必要性を強く感じた[17]。

こうした天皇家に関わる神道の機能、神社の分布や役割も戦後の日本社会では完全に忘れられた存在であり、戦前の文献を理解する際、こうした現在では抹消され忘れられたコンテクストを以下に復元するのかが大きな課題と言えよう。

b) 台湾占領の経過

以上は日本側での忘れられたコンテクストの一つであるが、戦後の国民党独裁政権下では台湾社会にとっても日本統治時代の事績は 1990 年代まで直接語ることができない禁忌であった。従って、1895～96 年の大日本帝国陸軍の台湾占領に伴う台湾社会の事績も日本統治時代における変形と同時に国民党支配による変成さらには日本での左翼史観による偏向、戦後の日本社会での忘卻を被っていると考えられ、その再現は実は容易なものではない。

その代表として『台湾縦貫鉄道』では敵方として登場する台湾民主国に関する一連の記述がある。

（あ）台湾民主国

Wikipedia「台湾民主国」

略史

日清戦争に敗北した清朝は下関条約により台湾及び澎湖諸島を日本に割譲した。割譲の決定を知った台湾住民の間ではこれに反発、当時の一部の反割譲派の官僚と一部住民が協力し 1895 年 5 月 23 日に台湾民主国独立宣言を発表、24 日には各国語に翻訳し駐台湾の各国領事館に通知している。そして 25 日独立式典を実施し台湾民主国の成立を宣言した。

独立式典では、唐景崧を総統に選出するとともに、青地に黄虎の黄虎旗を国旗と定め、永清と改元した。当時台湾第一の富豪であった林維源を国会議長に推戴するが、林はこれを拒否、100 万両を新政府に献金したのち、27 日には廈門に逃亡してい

[17] 中華週報（2000.7)「目で見る東京のなかの台湾［日光篇］神になった北白川宮と台湾植民地化」http://www.roc-taiwan.or.jp/news/week/1981/112.html

airiti

る。

5月29日、日本軍は澳底（現在の台北県貢寮郷）に上陸すると、傭兵を主体としていた民主国軍は総崩れとなり、6月3日には基隆を占拠されてしまう。これにより新政府は空中分解、翌4日には唐景崧は老婆に変装し、公金を持ってドイツ商船のアーター（Arthur）号に乗船して廈門に逃亡してしまう。（これにより台湾民主国は滅亡すると主張する史家も存在している）

唐景崧が逃亡したことで、民衆は6月下旬に台南で大将軍劉永福を第二代台湾民主国総統に選任した。後世の史家はこれを台南共和（Tainan Republic）や第二共和（Second Republic）と称している。

劉永福が総統に就任して3ヵ月後、民主国と日本軍の間で戦闘が繰り返されたが、10月下旬には劉永福は中国に逃亡し、台南も日本軍によって占拠され、ここに184日の短命政権は完全に崩壊したのである。

台湾民主国年表

5月23日:「台湾民主国自主宣言」発表

5月25日:台湾民主国総統に唐景崧就任，台灣民主国が正式に成立。永清と改元

5月29日:近衛師団が澳底より上陸

5月30日:唐景崧が令民主国部隊に対し瑞芳龍潭堵及び基隆獅球嶺砲台の防衛を命令

6月1日:清国代表李経芳と日本代表樺木により台湾割譲成立。民主国議長林朝棟廈門へ逃亡

6月3日:獅球嶺砲台と基隆が陥落、民主国軍崩壊

6月4日:唐景崧、丘逢甲が公金を横領し中国に逃亡。第一共和崩壊

6月6日:民主国軍により台北略奪。辜顕栄などの商人が日本統治を承認

6月11日:日本軍台北を占拠

6月17日:日本による施政開始

6月22日:日本軍新竹を占拠

6月26日:劉永福が台湾民主国総統に就任

7月9日:台湾民主国義勇軍新竹にて敗北。呉紹組自殺

8月14日:日本軍苗栗を占拠

8月28日:彰化八卦山の闘い。呉湯興及び呉澎年死亡

8月29日:台湾知府黎景嵩逃亡

8月29日:日本軍彰化を占拠

9月:廈門にて「台湾民主国股份票」発行

9月1日:日本軍雲林を占拠。羅汝沢中国へ逃亡

10月7日：日本軍斗六を占拠。簡義雲嘉山に逃れ鉄国山を名乗る

10月10日:日本軍第四旅団嘉義布袋港より上陸

10月11日:日本軍第二師団枋寮より上陸

10月12日:民主国駐東港管帯呉光忠逃亡

10月15日:日本軍嘉義を占拠

10月16日:日本軍鳳山を占拠

airiti

10月18日:日本軍台南市を包囲
10月19日:台湾民主国総統劉永福中国に逃亡
10月20日:民主国首脳が逃亡した為台南市内混乱。台南商人が日本軍による治安維持を要請
10月21日:日軍台南入城,「台湾民主国」崩壊
11月18日:台湾総督府による全島平定宣言が出される
台湾民主国に対する評価
この短命政権に対し、歴史学者の間でも評価が分かれている。
先ずは欧米で散見される「共和国」の人工性を強調する視点であり、これらは清朝の官僚に主導され、国際的な支持を得ることで台湾に日本の権益浸透を阻止することに主眼を置き、清朝に忠誠を尽くし、一般の台湾人の支持は得られていなかったとするものである。李筱峰の主張によれば台湾民主国は台湾独立運動の嚆矢とは言えず、清朝の官吏が日清戦争敗北後に台湾を講和条件に提起したことに対する住民の反発を恐れたため、台湾における反日運動を計画、住民に対し日本軍の占領と、清朝は台湾を放棄した訳でない事を印象付けるための行動と分析される。
次に中国の民族主義者に多く見られる傾向であるが、台湾民主国を中国人による抗日運動の一環と位置づけ、台湾の主権問題を中国に帰属させる視点である。黄秀政や頼建国らは台湾民主国を台湾独立を画策したものでなく、清朝に帰属させるための過渡期であったと評価している。
この対極に位置する台湾独立派の歴史家の視点を紹介すると、その代表人物とされる史明は台湾民主国は独立自主を標榜したが、その代表の思想は台湾の大衆とは一致するものではなかった。全ての政治目標は清朝の統治下の中国の枠組みを超えることはなかったと評価し、王育徳も台湾民主国の独立宣言に「恭奉正朔，遙作屏籬（清の暦を用い、戸籍に入る)」という一文が含まれていることから、その独立の精神に懐疑的な意見を発表しており、統一派と類似した見解を述べている[18]。

台湾民主国と大日本帝国陸軍との戦闘は現在では乙未戦役とも呼ばれるようになっているが、これも、新しい事実や資料が発見されたためにこうした呼び方がなされるようになったのか、あるいは、今まで同じ様な偏向によって生まれて来た見方なのかは容易には判定できない[19]。しかしながら、戦闘において惨禍を台湾社会が被ったことは確かである。

（い）政治的意図による史実の歪曲

[18] Wikipedia「台湾民主国」http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%B0%E6%B9%BE%E6%B0%91%E4%B8%BB%E5%9B%BD
[19] Wikipedia「乙未戦役」http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B9%99%E6%9C%AA%E6%88%A6%E4%BA%89

airiti

現在では中華人民共和国が第一列島線の要地である台湾、沖縄等への領土的野心を示す中[20]で、1895～96年の出来事および日本統治時代の台湾に関して様々な言説を流すようになっている。

劉江永（中国国際関係研究所研究員）「台湾に対する日本帝国主義の植民統治」

百余年前、日本は甲午戦争（いわゆる「日清戦争」）と「馬関条約」によって、中国から台湾を奪った。半世紀にわたって台湾に対する日本の植民統治は、1945年の日本の敗戦、投降によってようやく終止符が打たれた。

台湾は古くから中国の神聖な領土である。早くも紀元3世紀、三国時代の東呉政権は、人を台湾にくり出して開拓させた。当時台湾は「夷州」と呼ばれていたが、隋の時代に「流求」と改められた。紀元12世紀、南宋政権は軍隊を澎湖に進駐させるとともに、それを福建省建泉州晋江県の管轄下に置いた。「台湾」の名称は、明の万暦年間、台南の旧「大湾」港の呼び名がなまったものである。1624年、オランダとスペインの植民地主義者は武力で台湾を不法占領し、約40年にわたって統治した。当時、西欧列強は台湾を「フォルモサ」（美しいという意味）と呼んでいた。1662年、鄭成功は台湾をとり戻したのち行政機構を設け、1684年、それを台湾府に改めた。1772年、清朝政府は「台湾」を政府の統一名称とすることを決め、その後1885年、公式に台湾省を設けた。

日本帝国主義の台湾に対する侵略・拡張には、古い歴史がある。明治維新ののち、日本は欧米列強に伍して、中国を分割しようと企んでいた。早くも甲午戦争前の1874年5月、日本は台湾に漂流した琉球人が殺害されたことを口実に、軍隊を台湾に遠征させた。当時イギリスは、日本を利用してツァー・ロシアを牽制するため、しばらく台湾攻略を延ばすよう日本に要請した。その頃、台湾にマラリアが流行していたため、日本軍は大きな損害をこうむった。そこで、日本は、清朝政府が日本に賠償を支払い、琉球が日本に帰属することを認め、日本の出兵が「民を安んずる義挙」であったことを認めるよう要求したあと、しばらく台湾から撤兵した。しかし、それで問題が片づいたわけではなかった。

1884年10月16日付けの日本『時事新報』に掲載された予測記事の「支那帝国分割図」は、すでに中国の福建と台湾を日本の版図に組み入れていた。これからも分かるように、日本帝国主義の台湾占領は、さらにその侵略範囲を中国大陸に拡張する踏み台にすぎなかったのである。当時日本でかなり大きな影響力のあった著作『東方策』は、なにはばかることなく「若し又琉球諸国の主権者にして、台湾島を以て、軍事上の基礎を建てる

[20] Wikipedia「第一列島線」http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AC%AC%E4%B8%80%E5%88%97%E5%B3%B6%E7%B7%9A

airiti

に至れば、其国は全太平洋の全権を握る主権者とならん」と述べている。1887 年、日本陸軍参謀本部が作成した「清国征討策」は、5 年間にわたって準備をととのえ、チャンスをつかんで中国に「国運をかけた」戦争を仕かけることを打ち出していた。1894 年 7 月 25 日、日本が宣戦布告もなしに引き起こした甲午戦争は、日本が力ずくで台湾を占領し、中国を侵略する序幕となった。日本は戦争によって中国の遼東半島を占領したばかりでなく、北京攻略のおどしをかけて、1895 年 4 月 17 日、清朝政府を強迫して屈辱的な「馬関条約」を締結させた。同条約に基づいて、中国は遼東半島、台湾および澎湖諸島を日本に割譲するだけでなく、日本に 2 億両の銀を賠償することになった。当時、ロシアは、日本が遼東半島を占領したら直接その利益がおびやかされると考え、独仏二国と組んで、日本に対し三国干渉を行った。このため、日本はやむなく中国から 3000 万両の銀をとり立てたのち、しばらく遼東半島は放棄したものの、これだけは待てないとばかり、先に台湾を侵略し、占領しようとした。台湾人民と駐とん部隊は、進入してきた日本軍に頑強に抵抗した。日本軍は 1895 年 5 月から 11 月までの 5 カ月にわたった血なまぐさい虐殺ののち、やっと台湾全土を占領した。

日本は台湾占領後、半世紀にたわって植民統治を行ったが、その手段は台湾人民に対する残酷な弾圧だった。1896 年、日本国会で採択された「第 63 号特別法」は、台湾総督に、台湾人民弾圧のさまざまな特権を授けた。台湾人民の蜂起を弾圧するため、日本は台湾人民に対して軍隊、憲兵、警察の三位一体の討伐と支配を実行した。台北では、簡大獅氏の家族十余人が日本軍にみな殺しにされた。この不具戴天の仇に報復するため、彼は民衆を率いて 1896 年元旦に決起し、日本軍と百回も決戦をまじえたすえ日本軍に殺された。台南では、余慶芳が 1915 年 7 月に蜂起を指導し、日本軍の重要拠点であった西来庵市街区を攻撃した。この蜂起を弾圧するのに、日本軍は 3 万人余りの台湾人を虐殺した。台中では、1930 年 10 月高山族の人民が霧社蜂起を起こし、日本軍はこともあろうに飛行機を使ってガス弾を投下し、高山族を絶滅させるような虐殺を行った。

日本は台湾占領後、フランスの植民統治方式をモデルとした同化政策を実行した。1914 年 12 月、日本は台湾で「台湾同化会」を発足させ、「日台一体化」の思想を鼓吹した。それは、台湾と日本本土との完全同化をねらったものであった。1937 年、日本は全面的な中国侵略戦争を引き起こしたあとも、台湾でいわゆる「皇民化運動」を繰り広げ、漢語の使用、中国戯曲の演奏などを禁止し、台湾人が日本人の姓名に改名し、一律に「皇民」になることを強制した。

経済の面では、日本は台湾に対し植民地的略奪を行った。当時、日本は台湾の大量の農地と山林を占有し、1943 年に台湾から略奪した米は 1905 年の 6 倍となり、そのころの台湾人の一人当たり米保有量は 3 分の 1 も減った。1944 年の統計によると、台湾企業の 90%以上は日本人によって占められていた。製糖業を例にとると、旧三井、三菱財閥の製糖会社だけで、台湾の製

airiti

糖量の半分以上を占め、日本が毎年台湾から略奪した砂糖は台湾の砂糖総生産量の 60%を上回った。
第二次世界大戦中、日本はまた大量の台湾人を軍務や労役に強制徴集し、3 万人もの台湾人の命を奪った。日本軍閥が台湾に対して行った残虐な侵略と統治は、台湾人民をして百回も抗日起義に立ち上がらせたが、いずれも孤立無援のため失敗した。1945 年 8 月 15 日、日本政府は「ポツダム宣言」を受け入れ、降伏を宣言し、日本の台湾支配に終止符が打たれた。
　ところが、日本国内にはいわゆる「台湾の帰属未定」論がずっと存在し、一部の人びとは、台湾が中国領土の一部であることを認めようとしない。これは明らかに根拠のないことである。1972 年 9 月 29 日に調印された「中日共同声明」の第 3 項には、「中華人民共和国政府は、台湾が中華人民共和国の領土の不可分の一部であることを重ねて表明する。日本国政府は、この中華人民共和国政府の立場を十分理解し、尊重し、ポツダム宣言第 8 項に基づく立場を堅持する」とある。「ポツダム宣言」の第 8 項には、日本は「カイロ宣言」の条項を履行しなければならないとある。つまり、日本は中国から奪い取った満州、台湾、澎湖諸島などを中国に返還しなければならないのである。当時、中華人民共和国はまだ成立していなかったため、「中華民国」という名称を使ったものの、故外相大平正芳氏は 1972 年 10 月 28 日、第 70 回国会の外交演説の中で、台湾は「これら二つの宣言に照らして、中国の返還すべきである」との日本政府の立場を重ねて明らかにし、これは「パツダム宣言を受諾した政府の変わらざる見解である」と強調した[21]。

インターネットでのこうした言説の流布は現在非常に活発であるが、果たしてそれが歴史記述なのか、あるいは歴史小説に近いフィクションなのかは容易には判定しがたい。

（う）台湾での言説

台湾の中でも 1895～96 年の出来事に関する、典拠の不明な様々な言説が幅広く流布している。以下は、台湾政府の出しているホームページであるが、一切資料の出典は示されていない。

交通部觀光局「台灣發展史」乙未割台和台灣抗日史第二節、台灣民主國的形成與奮戰
第二節、台灣民主國的形成與奮戰（尹章義）
　割台之議傳到台灣，一時之間輿論沸騰，台灣忽爾便要改朝換代，任誰也不能置信，悲痛、憤慨皆不足以形容當時人心於萬一，台灣官紳爲求保住台灣，四處奔走，想盡各種辦法，甚至有質押或買與英、德、美之議，各國凜於日中和議都不願承受，最後，

[21]「北京週報」2005/09/02 http://www.peoplechina.com.cn/maindoc/html/zhuanti/60year/text/7.htm

airiti

爲爭取國際同情，宣布成立「台灣民主國」(5.25)，以獨立國之名，與日本繼續作戰，雖然前後只維持了五個月，卻成爲亞洲第一個民主共和國。台灣民主國成立之後，大家推當時的台灣巡撫唐景崧爲總統，呈上「藍地黃虎旗」爲國旗，國號爲「永清」，表明建國是不得已的辦法，台灣臣民永遠心向大清，此外，並設議院、籌防局和團練局，由有力人士主持，積極準備軍務。

在此同時，日人預備接收台灣的軍隊船艦，由能久親王（明治天皇的弟弟北白川中將）率領，來到了台灣外海，由於辦理交接的清朝代表李經方不敢上岸，便在海上與台灣首任總督樺山資紀辦理割讓手續。日軍到了淡水港附近，遭到守軍強烈的抵抗，日人見淡水港不易攻下，便改由三貂角附近的澳底登陸，守軍不戰而潰，日軍遂輕易拿下瑞芳、基隆，唐景崧、丘逢甲等人見情勢危急，紛紛倉皇內渡。領導中心一失，台北城內便陷入了混亂，燒殺劫掠不斷，於是台北紳商以李春生爲首，起用了一位年輕雜貨商，前去日軍陣營，要求日軍平亂並引領日軍進佔台北城。日軍拿下台北城後，於 6 月 17 日在巡撫衙署舉行總督府始政儀式，宣布開始統治，這個日子被日人設爲「台灣始政紀念日」。

當台北的變故傳到台南時，地方士紳便推舉劉永福繼任大總統，因爲當時台灣三大防區首腦－北區唐景崧、中區林朝棟均已內渡，只剩南區的劉永福，但劉永幅不肯，仍以軍務總辦之名繼續領導抗日。這時，在台北的日人繼續往南推進，日軍在桃園、新竹、苗栗皆遭到義軍紛起抵抗，戰鬥相當慘烈，六、七月間，義軍一再與日軍接戰，一度反攻新竹，殲滅日本騎兵於大湖口，劉永福也派吳彭年率黑旗軍北援，在新竹、苗栗一帶相持一個多月，八月初，日軍大舉進犯，並且增兵中南部枋寮、西部布袋嘴登陸，分三路向台南前進。

日軍八月中旬攻下苗栗，下旬在彰化八卦山與抗日軍發生激烈戰鬥，十月初嘉義淪陷，在這期間，義軍死傷慘重，劉永福手下大將吳彭年、吳湯興、徐驥等陸續死難，其中，日人曾一度透過英國領事勸降劉永福，遭到劉永福嚴詞拒絕。但是由於日軍採三路夾攻的方式，劉永福駐守的台南腹背受敵，在孤立無援的情況下，經過士紳的勸說，劉永福潛至安平港，內渡廈門，傳說劉永福喬裝成婦人，才躲過日軍的追捕。11 月 18 日，台灣總督樺山資紀向日本中央報告：全島平定。

台灣人民投入了一場沒有勝算的戰爭，但是日本十天之內攻下台北後，卻需近五個月的時間才能打到台南，深究之，實在於各地人民浴血作戰的精神，所以致之。日軍對於「有敵意或妨礙者」即實施「無差別殲滅」(不分軍民、男女老幼）和「三光掃蕩」(殺光、搶光、燒光)。由於吳湯興、姜紹祖、徐驥、胡嘉猷等率眾抵禦，六月十九日大湖口街兩百多家店舖「瞬息之間俱成焦土」(今湖口老街卻是昭和初年所建的「新」湖口街)；由於蘇力、陳小埤等頑抗，七月十四～廿四日間，日軍在海山口（新莊）三峽間，燒燬房屋千餘戶。稍後同一地區又掃蕩兩次，其燬屋三千，殺人四千五百「屋倒牆頹、腐屍遍野」，六萬多人流離失所。彰化八卦山之役吳彭年等力戰而亡，城破，日軍「縱橫屠斬」，「死屍塡塞街衢、血流漂楯」；雲林知縣李品三堅守不退，徐驥、簡義、林義成堅挺，日軍大肆奸淫虐殺；南路日軍自枋寮登陸，進攻茄苳腳

airiti

（屏東佳冬），蕭光明、黃蘭妹等力抗，結果是「野無遺子」，鳳山城攻破後，大肆殺戮，城中也幾無活口。
前數的例子不勝枚舉，僅就北、中、南三區各舉數例，可見日軍殺戮之慘。
日本據台四十年，調查官井出季和大根據總督府檔案寫成《台灣治續志》，在第一任總督樺山資紀的靖台事略中謂：自光緒廿一年五月廿六日自十二月十五日，日軍陣亡 164 人，傷 515 人，病亡 4,642 人，在台病患 5，246 人，後送日本就醫者 21,748 人；中國軍隊陣亡爲七萬八十人。從塵戰五月、戰況激烈、再三增兵、增軍費，日本國內譴責之聲四起，日軍侵台指揮官能久親王死後密不發喪（死於何時、何地、死因爲何至今成謎，台灣北起新竹、南迄佳里，都有殺死地的傳說）等事跡觀察，所述日方之陣亡、受傷人數，可能有匿報或轉嫁爲病亡、病患之嫌。而中國方面之人數只報陣亡者，各地掃蕩、屠殺人民之數亦未一一上報，實情恐怕也難以數計，僅就已知的數字加總，台灣受害人口當在十萬以上[22]。

台湾政府のホームページですら、明らかに第二次世界大戦時の中国大陸での大日本帝国陸軍の作戦行動に関する形容「日軍對於「有敵意或妨礙者」即實施「無差別殲滅」（不分軍民、男女老幼）和「三光掃蕩」（殺光、搶光、燒光）」をそれとはまったく時代の異なる 1895～96 年の出来事に意図して用いており、事実の再現にはほど遠い現状が窺える。また、「自光緒廿一年五月廿六日自十二月十五日，日軍陣亡 164 人，傷 515 人，病亡 4,642 人，在台病患 5，246 人，後送日本就醫者 21,748 人；中國軍隊陣亡為七萬八十人」とあることから分かるように、近代的統計のあった明治時代の日本社会が戦没者の数をかなり正確に出せたのに対して、そうした制度を持っていなかった清国側の数字にはほとんど根拠がないことも分かる[23]。しかしながら、戦闘過程で多くの犠牲を台湾社会がはらったことは確かである。

以上、現在流布しているインターネットの言説から見る限り、1895～96 年の出来事に関して正確な伝承や資料はなく、様々な一次資料あるいは二次、三次資料の恣意的引用から

[22]交通部觀光局「台灣發展史」乙未割台和台灣抗日史 http://61.60.100.220/%E5%8F%B0%E7%81%A3%E7%99%BC%E5%B1%95%E5%8F%B2/chop11-1.htm#第二節、台灣民主國的形成與奮戰
[23]郭弘斌『台湾人的台湾史』http://www.taiwanus.net/history/4/5.htm

airiti

様々な臆説が流布されているに過ぎない状況が窺える。こうした状況から言えば、1895～96年の出来事に関して歴史小説と歴史記述の区別は現在の私達にとって困難であり、こうしたテクストから再現可能なものはテクストの性格によってそれを述べた作者の歴史的事実への関係の仕方が明らかになるに過ぎないとも言える。

C) 当時のアジアと軍隊の性格

さらに、1895～96年の出来事に関して、その喪われたコンテクストを再現する際に困難をもたらすものは、当時の世界史的状況である。大日本帝国と台湾社会との戦争状態は、当時の世界では当たり前だった帝国主義的征服の類例中のひとつの例であった。当時の帝国主義諸国による植民地獲得戦争の例を見てみる。

（あ）米比戦争

米比戦争は、1899年にアメリカ合衆国とフィリピンの間で起きた戦争である。

> 1898年12月のアメリカスペイン戦争パリ講和条約で、アメリカはスペインからグアム、プエルトリコ、ヴァージン諸島とともに、2000万ドルを支払い、フィリピン諸島を獲得、併合した。よく1899年2月、併合を拒否するフィリピン革命軍と米軍の戦闘が始まった。今でも米軍戦史で公式には「フィリピン反乱」と呼ばれている米比非戦争は、米軍詩情初めての長期にわたる海外遠征戦争であり、のべ12万にのぼる兵力が投入され、アメリカの対外戦争史上、当時としては空前の4200人あまりの戦没者を出した。一方フィリピン側では、革命軍の戦没者に加えて、戦争がゲリラ戦の様相を呈するにしたがって非戦闘員や住民にも戦争被害が拡大し、サマール島の例のように米軍による虐殺事件も発生した。南北戦争でも盛んに行なわれた市街地の焼き討ちは、フィリピン各地の敏を破壊してその経済を疲弊させ、ゲリラと民衆との関係の切断をねらった強引な再集住政策は市民の生活基盤を破壊した。さらに近年の研究は、世界経済への開放がひとつの契機となり、革命の混乱のなかで深刻化したコレラなどの感染症がこの戦争の影野主役であったことを明らかにしつつある。米比戦争の感染症やマラリアの爆発的流行は、小党各地の人口を大幅に減少させる深刻な被害をもたらした。フィリピン革命から米比戦争を通じたフィリピン側の戦争犠牲者の数は少なくとも数十万単位にのぼると推定されてい

airiti

る[24]。

バランギカの虐殺

1898年にフィリピンはアメリカの植民地となった。各地で抵抗が続いたが、中でもサマールの人々は、最も果敢に、そして最後までアメリカへの抵抗を続けた。

1901年、サマールのバランギガで、約２００名の男たちが女装して教会に集まり、鐘を合図に米軍キャンプを襲撃した。７５名のアメリカ兵のうち、生き残ったのはわずか１０名ほどだったという。この闘いは、フィリピンの歴史の中でも、外国勢力に対する最大の勝利をおさめた歴史的な闘いだったと言われている。

しかし、直ちにアメリカによる報復が始まった。スミス将軍は、「捕虜はいらない。殺し尽くせ、焼き尽くせ。より多く殺し、焼き尽くすほどよいのだ。銃を持ち、刀とふるうことができる者は、１０歳の少年でも全て殺せ」と命じ、手当たりしだいにサマールの人々を殺し、村を焼いた。まさに「死と破壊の饗宴」（コンスタンティーノ）だったと言われている。殺戮は９ケ月も続き、サマール全土を焼き尽くす火は、７年間に渡って燃え続け、５万人もの人々が殺されたと言う。

当時、サマールは、この大虐殺により、「死に絶えた荒野」と呼ばれた。(『フィリピン・幸せの島サマール』P94)

フィリピンの歴史を語るときに、バランギガは最も重要な地の一つと言われている。

ジェイコブ・スミス将軍は、1890年、ウンデッド・ニーでインディアン婦女子50名あまりを含む150名あまりを虐殺した事件にも関係していたと言われる[25]。

大日本帝国が台湾で行った軍事行動同様、19世紀末期の帝国主義国家の軍隊の植民地での軍事行動は以上のような残虐性を伴う場合が多かったと推定される。

（い）ボーア戦争 1899-1900年

また、こうした問題は当時の世界では世界中に広がっていた普遍的状況であったと考えられる。

ボーア戦争（ボーアせんそう、Boer War、Anglo Boer War）は、イギリスとオランダ系アフリカーナーであるボーア人が南アフリカの植民地化を争った二次にわたる戦争。南アフリカ戦争、ブール戦争ともいう。

強制収容所

1900年6月ごろより、英軍司令官のホレイショ・キッチナーは、ゲリラとなったボーア軍支配地域で強制収容所（矯正キャンプ）戦略を展開しはじめる。これによって12万人のボーア人

[24]中野聡「帝国政策の試行」http://www.ne.jp/asahi/stnakano/welcome/2005ameso_04.pdf

[25] http://kyoto-samar.hp.infoseek.co.jp/newpage26.htm

airiti

が強制収容所に入れられ、さらに焦土作戦を敢行。広大な農地と農家が焼き払われた。この収容所では２万人が死亡したとされる[26]。

表 1885 年から 1894 年までの戦争[27]

| 1885-1894 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 名称 | 交戦団体 | 開始 | 終了 | 動員1000 | 戦闘の経過・終了方法など | 勝敗 | 結果 | 犠牲者1000 |
| ビルマ戦争 | 英国 | 1885 | 1895 | 25 | … | 勝利 | 植民地化 | 4 |
| | ビルマ | 1885 | 1895 | 50 | 交渉による和平 | 敗北 | 王家追放 | 2.5 |
| マンディンガ戦争 | フランス | 1885 | 1898 | 25 | … | 勝利 | 植民地化 | 3 |
| | マンディンガ | 1885 | 1898 | 100 | 全滅 | 敗北 | 王国消滅 | 40 |
| （参考）マンディンガ族は西アフリカの代表的な民族で、ギニア、象牙海岸、マリ、セネガルまで広範囲に居住し、回教を信仰する。この民族の指導者としてギニア出身のサモリが現れた。サモリは１８６８年、自ら宗教指導者にしてかつ王であると宣言、ニジェール川流域全部にまたがる王国を創設した。この地域に広大な西アフリカ植民地を設けようとするフランスと当然対立、１８８５年から公然たる交戦状態に入った。サモリは一度は保護国を受け入れたが再度反抗、１８９８年捕らえられるまで戦いを続けた。 | | | | | | | | |
| 宗教戦争（ウガンダ） | 回教徒 | 1885 | 1889 | 25 | … | 勝利 | 布教の合法化 | 3 |
| | カトリック教徒 | 1885 | 1889 | 100 | … | 敗北 | … | 40 |
| （参考）当時英国東アフリカ植民地の一部であったウガンダで起きた回教徒とキリスト教徒による戦争。回教徒が勝利した。勝利した回教徒は１８９７年英国に対し反乱を起こす。 | | | | | | | | |
| リアル反乱 | カナダ | 1885 | 1885 | 50 | … | 勝利 | 首謀者処刑 | 5 |
| | インディアン・フランス系住民 | 1885 | 1885 | 5 | 降伏 | 敗北 | … | 0.5 |
| セルビア・ブルガリア戦争 | オーストリア | 1885 | 1886 | 500 | … | 勝利 | … | 0 |
| | ブルガリア | 1885 | 1886 | 40 | 交渉による和平 | 勝利 | マケドニアの領有権獲得 | 2 |
| | セルビア | 1885 | 1886 | 40 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 2 |
| 奴隷戦争 | ベルギー | 1885 | 1898 | 50 | … | 勝利 | 奴隷貿易の禁圧 | 4 |
| | 英国 | 1885 | 1898 | 25 | … | 勝利 | 奴隷貿易の禁圧 | 3 |
| | アラブ系奴隷商人 | 1885 | 1898 | 5 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 1 |
| ズールー反乱 | 英国 | 1887 | 1887 | 25 | … | 勝利 | 現状維持 | 2 |
| | ズールー族 | 1887 | 1887 | 120 | … | 敗北 | … | 40 |
| アラブ反乱 | ドイツ | 1888 | 1890 | 25 | 独領南西アフリカで発生した奴隷戦 | 勝利 | 奴隷貿易の禁圧 | 0.5 |

[26] Wikipedia「ボーア戦争」http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9C%E3%83%BC%E3%82%A2%E6%88%A6%E4%BA%89

[27] 「百年間の戦争」http://ww1.m78.com/honbun-2/war1885-1894.html 作成の表に拠る。

airiti

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 争と同種の事件 | | | |
| | アラブ系奴隷商人 | 1888 | 1890 | 30 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 0.5 |
| アビシニア内乱 | エチオピア | 1889 | 1899 | 100 | 交渉による和平 | 勝利 | 政権維持 | 10 |
| | 叛徒 | 1889 | 1899 | 10 | 降伏 | 敗北 | … | 4 |
| ダホメー戦争 | ダホメー | 1889 | 1890 | 50 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 10 |
| | フランス | 1889 | 1890 | 50 | … | 勝利 | 現状維持 | 2 |
| ワヘヘ戦争 | ドイツ | 1891 | 1893 | 50 | … | 勝利 | … | 3 |
| | ワヘヘ族 | 1891 | 1893 | 30 | 交渉による和平 | 敗北 | 帰順 | 10 |
| （参考）ドイツ領南西アフリカでワヘヘ族が反乱を起こした。ドイツ人が奴隷貿易をめぐり特定の部族を応援したためだと言う。 | | | | | | | | |
| 第２次ダホメー戦争 | ダホメー | 1892 | 1892 | 50 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 1 |
| | フランス | 1892 | 1892 | 50 | … | 勝利 | … | 2 |
| ボルヌー反乱 | ボルヌー | 1893 | 1893 | 125 | 消耗 | 敗北 | 土侯国消滅 | 3 |
| | ゾベイル | 1893 | 1893 | 40 | … | 勝利 | … | 2 |
| | 英国・エジプト土侯国 | 1893 | 1893 | 50 | … | 勝利 | … | 1 |
| （参考）ボルヌー・ゾベイルはスーダンの部族。マフディ（１８８１－９９）の戦争の時はイギリス・エジプト側についたが、今回はサイドを替えた。ゾベイルは途中で寝返った。ボルヌーはオスマン帝国のスルタン認定地域（土侯国）だが、これにより消滅した。 | | | | | | | | |
| マタベラ戦争 | 英国 | 1893 | 1893 | 25 | … | 勝利 | 反乱鎮圧 | 2 |
| | マショナ | 1893 | 1893 | 19 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 7 |
| | マタベラ | 1893 | 1893 | 15 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 3 |
| （参考）マタベラ族は現在のジンバブエに王国を建設していたが、この時マショナ族を攻撃した。それに英国が介入し双方を鎮定した。マタベラは１８９６年英国に全面反攻する。 | | | | | | | | |
| 海軍反乱 | ブラジル | 1893 | 1895 | 200 | … | 勝利 | … | 26 |
| | 海軍兵反乱軍 | 1893 | 1895 | 5 | 消耗 | 敗北 | 帰順 | 1 |
| リフ戦争 | ベルベル人 | 1893 | 1893 | 10 | 交渉による和平 | 敗北 | … | 1 |
| | スペイン | 1893 | 1893 | 180 | 交渉による和平 | 勝利 | 現状維持 | 2 |
| （参考）リフはスペイン領モロッコにある山脈（マラケシュ・カスバタディア周辺）の名前。ベルベル人はそこに住む山岳民族。１９１２年に再びスペインに挑戦する。 | | | | | | | | |
| トゥアラグ戦争 | フランス | 1893 | 1893 | 50 | 交渉による和平 | 勝利 | 現状維持 | 2 |
| | トゥアラグ族（サハラ部族） | 1893 | 1893 | 8 | … | 敗北 | … | 3 |
| （参考）トゥアラグ族はニジェール川沿いに住む部族 | | | | | | | | |
| マダガスカル戦争 | フランス | 1894 | 1905 | 20 | … | 勝利 | … | 6 |
| | マダガスカル | 1894 | 1905 | 10 | 交渉による和平 | 敗北 | 帰順 | 1 |
| 日清戦争 | 清 | 1894 | 1895 | 3000 | 交渉による和平 | 敗北 | 領土割譲 | 35 |
| | 日本 | 1894 | 1895 | 300 | … | 勝利 | 領土・賠償金獲得 | 12 |

以上から帝国主義国家が植民地支配の過程で行った帝国主義戦争の苛烈さが分かる。こうした戦争は以上の資料のように全世界に広がっていた。たった 100 年前の現実であるに

airiti

も関わらず、ほとんど社会的に伝承されていない、こうした19世紀末の帝国主義戦争に関する事実とそれに対する評価も、現代の日本社会でも台湾社会でもすでに完全に喪われたコンテクストになっている。

## ３．おわりに

以上、今回は西川満『台湾縦貫鉄道』を読む際に問題になる、その語りが置かれていた当時の社会的コンテクストをいくつか取り上げてみた。ここから分かることは、歴史に関わるテクストを語りと言う点から見たとき、まず語る主体が属していた当時のコンテクストを再現するのは容易ではないということである。今回取り上げることができたのはごく一部に過ぎない。次に、再現の手段がないコンテクスト（例えば1895～96年の出来事の詳細）が多く存在し、現在流布している言説はいずれも「歴史記述」を標榜しながら実はフィクションあるいは「歴史小説」に近いものである。西川満『台湾縦貫鉄道』はフィクションと考えられるが、それが向き合った現実に関して現在の「歴史記述」がより多くの認識を持っているとは言えない。最後に、西川満『台湾縦貫鉄道』には作者とその時代の状況にはある期間抑圧が行われて抹消され、それが再び回復するケースが当てはまる。それは喪失記憶を呼び起こす行為に等しいと言える。

「歴史記述」も「歴史小説」もその語り手が置かれ対峙した状況に関して見れば、現在の我々には再現の手段がすでにほぼ喪われている点は同じである。両者を区別できるとすれば、それは語りの方法あるいは規則による区別以外にはないと言えよう。

（付記）以上は2007年1月27日「日本領台時期文學讀書會七」西川満『台湾縦貫鉄道（１）～（１１）』の発表に加筆、修正を加えたものである。